

從五位下備前守田中朝臣淨足 一首

五言晚秋於長王宅宴

冉冉秋云暮  
飄飄葉已涼  
西園開曲席  
東閣引珪璋  
水底遊鱗戲  
巖前菊氣芳  
君侯愛客日  
霞色泛鸞觴

新羅客の三字有りしならん。珪璋『禮記』に有以少爲貴者圭璋特と。『文心雕龍』に圭璋擬其惠心。英華秀其清氣と。美玉を以て、人品の美に譬へ、又文藻の美に譬ふ。君侯は長王を指す。

此の篇唐の五律の正法。二二の句は時節を敘し、三四の句は招宴の本旨を敘し、五六の句は庭中秋日の景色を敘し、七八の句は宴の宴たる第一義に歸結す。前に出る、金漢星榆の篇と軒輕無きを覺ゆ。

左大臣正二位長屋王 二首【五十四、又四十六】

五言元日宴應レ詔ニ

年光泛<sub>ニ</sub>仙籟<sub>ニ</sub>  
月色照<sub>ス</sub>上春<sub>ヲ</sub>  
玄圃梅已放<sub>ヒラキ</sub>  
紫庭桃欲<sub>ス</sub>新<sub>ナラント</sub>  
柳絲入<sub>リ</sub>歌曲<sub>ニ</sub>  
蘭香染<sub>ム</sub>舞巾<sub>ヲ</sub>  
於<sub>ニ</sub>焉三元<sub>ヲ</sub>節<sub>ニ</sub>  
共悅<sub>リ</sub>望雲<sub>ヲ</sub>仁

長屋王は前にも擧ぐ、天武天皇の孫、高市親王の子、官式部卿左大臣。天平元年讚に逢ひて自殺す。世に佐保大臣と稱す。

仙籟、禁籟、即ち禁苑なり。上春は二月なり。玄圃も紫庭も共に宮園を曰ふ。柳絲は新柳の條絲、上春に歌ふ曲。蘭香染舞巾、元日宮廷中の人、蘭香を以て巾を染むるならん。凡品評するに及ばず。

五言於<sub>ニ</sub>寶宅<sub>ニ</sub>宴<sub>ス</sub>新羅客<sub>ヲ</sub>一首賦得<sub>ニ</sub>煙字<sub>ヲ</sub>

高旻開<sub>キ</sub>遠照<sub>ヲ</sub>  
遙嶺靄<sub>タリ</sub>浮煙<sub>ニ</sub>  
有<sub>レ</sub>愛<sub>スルコト</sub>金蘭<sub>ヲ</sub>賞<sub>ヲ</sub>  
無<sub>シ</sub>疲<sub>ルコト</sub>風月<sub>ヲ</sub>筵<sub>ニ</sub>  
桂山餘景<sub>ヲ</sub>下  
菊浦落霞<sub>ナリ</sub>鮮  
莫<sub>レ</sub>謂<sub>フコト</sub>滄波<sub>ヲ</sub>隔<sub>タルト</sub>

長<sup>ク</sup> 爲<sup>ル</sup> 壯<sup>ニ</sup> 思<sup>ヒ</sup> 延<sup>カ</sup>

寶宅の文字異なるものと思ひしが、次の詩に作寶樓とあり、樓名なれば長屋王が客堂の謂。作寶は即ち佐保のことなり。高旻は高天なり。遠照乃ち夕照開き得て燦たり。而して遙嶺は浮煙が靄<sup>たなび</sup>く。晚餐會の催しなること知るべし。金蘭賞は未だ出典を知らざるが、文詞第一の賞を愛するとの意ならん。文詞を練るには風月筵に疲ること無し、疲るゝ人は賞を受くる資格無き人。古溪案ず。新羅客に對し、交友の厚意を示すにあらざるか。桂山、菊浦は秋日なれば假設しての名ならん。滄波隔、新羅と日本とは一衣帶水、何ぞ隔つと言はん。爲は「タメ」の仄聲にあらず、「ルル」の平聲なり、此の一字を平聲とすれば、全體完好の好律と爲る。

五言初春於<sup>ニ</sup>作寶樓<sup>ニ</sup>置酒

景<sup>ハ</sup>麗<sup>シ</sup> 金<sup>ニ</sup> 谷<sup>ノ</sup> 室<sup>ニ</sup>  
年<sup>ハ</sup>開<sup>ク</sup> 積<sup>ム</sup> 草<sup>ノ</sup> 春<sup>ニ</sup>  
松<sup>ノ</sup> 煙<sup>ニ</sup> 雙<sup>テ</sup> 吐<sup>キ</sup> 翠<sup>ヲ</sup>  
櫻<sup>ノ</sup> 柳<sup>ノ</sup> 分<sup>テ</sup> 含<sup>ム</sup> 新<sup>ヲ</sup>  
嶺<sup>ハ</sup> 高<sup>シ</sup> 閣<sup>ノ</sup> 雲<sup>ノ</sup> 路<sup>ニ</sup>  
魚<sup>ハ</sup> 驚<sup>ル</sup> 亂<sup>ル</sup> 藻<sup>ノ</sup> 濱<sup>ニ</sup>  
激<sup>シ</sup> 泉<sup>ヲ</sup> 移<sup>セ</sup> 舞<sup>ハ</sup> 袖<sup>ヲ</sup>  
流<sup>ル</sup> 聲<sup>ニ</sup> 韻<sup>ニ</sup> 松<sup>ノ</sup> 筠<sup>ニ</sup>

金谷は晉の石崇の別墅の在りし地名。石崇字は季倫、賓客を會し、詩の成らざる者は酒を三斗飲しむ。春なれば積草を用ひしならん、積草は石崇なり。松と煙と雙んで翠色。櫻も柳も分分に新容を呈す。嶺高、高處の景。魚驚低處の景。激泉十字、意義明白ならず、誤字もあらん。流聲の聲、或は他の字ならん。

從三位中納言兼催造宮長官安倍朝臣廣庭 二一首【年七十四】

五言春日侍<sub>レ</sub>宴<sub>ニ</sub>

聖<sub>ニ</sub> 衿<sub>ニ</sub> 感<sub>シ</sub> 淑<sub>ニ</sub> 氣<sub>ニ</sub>  
高<sub>ニ</sub> 會<sub>ニ</sub> 啓<sub>ク</sub> 芳<sub>ニ</sub> 春<sub>ニ</sub>  
樽<sub>ハ</sub> 五<sub>ツ</sub> 齊<sub>ク</sub> 濁<sub>ニ</sub> 盈<sub>チ</sub>  
樂<sub>ガクハ</sub> 萬<sub>ン</sub> 國<sub>ク</sub> 風<sub>ウ</sub> 陳<sub>ス</sub>  
花<sub>ニ</sub> 舒<sub>テ</sub> 桃<sub>ニ</sub> 苑<sub>ニ</sub> 香<sub>シク</sub>  
草<sub>ニ</sub> 秀<sub>ニ</sub> 蘭<sub>ニ</sub> 筵<sub>ニ</sub> 新<sub>ナリ</sub>  
堤<sub>ニ</sub> 上<sub>ニ</sub> 飄<sub>ヘリ</sub> 絲<sub>ニ</sub> 柳<sub>ニ</sub>  
波<sub>ニ</sub> 中<sub>ニ</sub> 浮<sub>ク</sub> 錦<sub>ニ</sub> 鱗<sub>ニ</sub>  
濫<sub>ニ</sub> 叨<sub>ニ</sub> 陪<sub>シ</sub> 恩<sub>ニ</sub> 席<sub>ニ</sub>  
含<sub>レ</sub> 毫<sub>ヲ</sub> 愧<sub>ツ</sub> 才<sub>ノ</sub> 貪<sub>キヲ</sub>

廣庭は御主人が子。御宴に侍しての詩。天子淑氣に感じ玉ひ、今日芳春の高會を啓き玉ふ。樽五、濁酒が五樽に盈つとなり。樂萬國風陳、新羅の寶も加はるならん、故に國風陳の字あり。國風は詩なり。古は諸侯各、其の國の民俗歌謠を以て天子に貢す。而して樂官<sub>がく</sub>に列する者、是を國風と爲す。其の人を感ずる。風の物を動かすが如きを謂ふなり。『毛詩』の周南、召南、逐風の篇の如き、皆國風と謂ふ。是の句の讀方、「樽八五ツ齊シク濁盈」、「樂<sub>がく</sub>は萬<sub>まん</sub>にして國風陳ス」と訓む。花舒以下四句は皆春日の景色。九十の二句は、今日宴に侍して其の無能を愧づと謝するなり。

五言秋日於<sub>ニ</sub>長王宅<sub>ニ</sub>宴<sub>ス</sub>新羅客<sub>ノ</sub>賦得<sub>ニ</sub>流字<sub>一</sub>

山<sub>ニ</sub> 牖<sub>イウ</sub> 臨<sub>ニ</sub> 幽<sub>ニ</sub> 谷<sub>ニ</sub>  
松<sub>ニ</sub> 林<sub>ニ</sub> 對<sub>ス</sub> 晚<sub>ニ</sub> 流<sub>ニ</sub>

宴 庭 招 遠 使  
離 席 開 文 遊  
蟬 息 涼 風 暮  
雁 飛 明 月 秋  
傾 斯 浮 菊 酒  
願 慰 轉 蓬 憂

牖は「マド」、戸牖と成語して、壁にあげたる窗。格子をはめたる窗。晚流、晚日が流水に移る時刻。遠使は新羅の客。蟬息、雁飛の二句十字頗る佳。秋なれば涼風、秋なれば明月。傾は十分に飲での意。菊花を酒に浸して飲む、浮菊酒は是れなり。延命の爲めなりと云ふ。轉蓬憂、客と爲て日本に來遊する、其の客中の憂を慰めんとなり。

茲篇も平仄法整正として、諸家に勝るものあり。

大宰大貳正四位下紀朝臣男人 三首

七言遊吉野川

萬丈崇巖削成秀  
千尋素濤逆析流  
欲訪鍾池越潭跡  
留連美稻逢槎洲

吉野川は大和國に在り、水上はみなかみ大臺原山に出づ、東より西に流れ、吉野山麓に至て、南流、紀州紀の川に出で、以て熊野川に合流するなり。吉野郡は大和一國、第一の山郡にて東西南北、皆重疊山嶺のみ、萬丈崇巖千尋素濤、其の眞に逼るの語なり。欲訪鍾池越潭跡、『晉書』「王羲之傳贊」に曰く、伯英臨池之妙。無復餘蹤。師宜懸帳之奇。罕有遺跡。速乎鍾王以降。略可言焉。鍾雖擅美一時。亦爲タリト迴絶上論。其盡スレバ善。或有ハリ所疑。詳察スレバ古今。研精篆素。盡シ善盡之美。其唯王逸少乎。『南越志』に、綵安縣北有連山。昔越王建德。伐木爲船。以童男女三十牽之。既而人船俱墮于潭。時間附船有倡喚督進之聲。往往有青牛馳回與船俱墮。共に其の急流の危険を言ふ。留連の七字意義未レ檢。

五言扈從吉野宮

鳳蓋停南岳  
追尋智與仁  
嘯谷將ト孫語  
攀藤共ニ許親  
峯巖夏景變  
泉石秋光新  
此地仙靈宅

何須姑射倫

上市に近き處、單に芳野にて、丹生明神の地方を南芳野と稱するは今日の地理なるが、古は吉野を總稱して南岳と喚しなるべし。『日本紀』に曰く、三年乙丑【持統天皇】正月天皇幸吉野宮、八月幸吉野宮、四年庚寅二月幸吉野宮、五年辛吉野宮、五月辛卯正月幸吉野宮、四月幸吉野宮、と天皇が吉野を愛し玉ふこと知るべし。從て柿本人麻呂や、弓削皇子の歌など有名のものたるなり。因て考ふ、『萬葉』に三芳野乃玉松之枝者の三は芳野に北とか西とか南と此の三ありしものと。勿論三は御にして三井寺を三井寺と書する類多し。然れども三井寺には、實際空假中三諦の三箇の井水ありしなり。何ぞ必ずしも御の意ならん。而かも今は考證の用なし。今此の天皇は持統なりや、文武なるや未詳。寺は與に作る本が可。智與仁山と水とを尋ぬるなり。嘯谷嘯くと雖も、答ふるものは猿聲のみ。路無き所は藤に攀て登る。藤と我と親み深し。夏景は已に變じ、今日は秋光新なり。此地は居然仙靈の窟宅する所なり、姑射の神山の別に問ふの要無し。

五言七夕

犢鼻標竿日  
隆腹曬書秋  
風亭悅仙會  
針閣賞神遊  
月斜孫岳嶺  
波激子池流  
歡情未充半  
天漢曉光浮

犢鼻は犢鼻褌の略なり。犢は兒牛なり、兒牛の鼻の如き形なればなり。一字に

て禪フモトシとも書す、禪褙ふとしとも書す。和名「タフサギ」「スマノモノ」「フドシ」「フンドシ」は賤者の俗語。標竿日、晉の阮咸と云ふ奇人、七月七日に竿を以て大布の犢鼻褌を庭に掛けて曝せし事あり。隆腹曬書秋、晉の郝隆カクは七月七日、白晝外に出て仰臥す。人恠しむ、此酷暑に臥つて樂しむは何事ぞと。隆曰く、世人は衣服を曬サラし、富に誇るも、我は衣服の曬すべき無し、胸中に萬卷の書あり、是れ以て腹を曬すなりと。風亭、針閣、唐の宮中七夕の夜、宮女各の九孔の針、五色の線を執て、月に向て之を穿つ、過る者巧を得たりと爲す。梁時は雙眼針を用ふと云ふ。針閣の字より針樓と用ふるもの多し。孫岳、子池、未考。歡情、此の夕を賞する感は、總て牽牛と織女星に關することが第一義であれば、賞する者も思ひ此に至らざるを得ず。而かも夜は短なり、忽にして曙光の浮ぶを見る、是れ之れ奈何せん。



正六位上但馬守百濟公和麻呂 二首【年五十六】

五言初春於<sub>ニ</sub>左僕射長王宅<sub>一</sub>讌

帝里<sub>一</sub> 浮<sub>ハ</sub> 春色<sub>一</sub>  
上林<sub>一</sub> 開<sub>ク</sub> 景華<sub>一</sub>  
芳梅<sub>一</sub> 含<sub>レ</sub> 雪散<sub>シ</sub>  
嫩柳<sub>一</sub> 帶<sub>レ</sub> 風斜<sub>一</sub>  
庭煥<sub>ニ</sub> 將<sub>レ</sub> 滋<sub>ニ</sub> 草<sub>一</sub>  
林寒<sub>一</sub> 未<sub>レ</sub> 笑<sub>ニ</sub> 花<sub>一</sub>  
鶉衣<sub>一</sub> 追<sub>ニ</sub> 野坐<sub>一</sub>  
鶴蓋<sub>一</sub> 入<sub>ル</sub> 山家<sub>ニ</sub>  
芳舍塵思寂<sub>カニ</sub>  
拙場風響譁<sub>一</sub>  
琴樽興未已<sub>ヤマ</sub>  
誰載<sub>カ</sub> 習池<sub>セン</sub> 車<sub>一</sub>

長王宅に於て、初春の風氣を歌ふなり。帝里は帝都と同じ。上林は特に禁苑を言ふ。長王は皇系に屬する人、上林の文字を使用する所以。景華は春の物華。梅は散じ、柳は斜、己に暖氣なるを知る。庭所、燠は暖なり。庭は暖なるが故に、草色漸く滋からんとするも、林中は寒うして、未だ開かざる花あり。初春の氣分然るなり。鶉衣は貧者の服。『荀子』に子夏貧。衣若<sub>シ</sub>縣鶉とあり。「ウヅラ」なる鳥は尾短かく、色美ならざればなり。追野坐、句意解し難きが、案ずるに自分を謙遜して我は鶉衣の徒、野坐を追ふが其の分なるに、今や鶴蓋して山家に入らんとは、山家は長王の宅を言ふならん。而して芳舍は或は茅舍の誤寫ならん。茅舍とすれば、前の芳梅と極めて合す。塵思寂、茅舍は塵思を斷つ、斷つが故に寂寥たり。拙場風響譁何等の意味を表はすにや、要を得ず。琴樽興未已、誰載習池車、

習池は習家池ならん。高陽池とも云ふ。晉書に、諸習氏荆土の豪族、佳園池を有す。興未だ已ざるを以て車を回す勿れの意味ならん。此の篇は一氣貫通せず、支離滅裂の詩なり。長きを欲して、而かも短の用を爲さず。惜む可し、惜む可し。

### 五言七夕

仙期逐織室  
神駕逐河邊  
笑臉飛花映  
愁心燭處煎  
昔惜河難越  
今傷漢易旋  
誰能玉機上  
留怨待明年

仙期は仙家住期なり。唐の李義山の詩に恐是仙家好別離。故教迢遞作佳期とあり。織室は織女に今夕は佳期であると呈示する。此の夕烏鵲河を填めて橋を成し、以て牽牛と織女とを渡すなり。神駕逐河邊是れなり。笑臉、臉は笑臉、玉臉、妝臉など成語して、顔面の義に用ふ。飛花映は、花の如く美麗なる意味のみ。愁心燭處煎、曾て天帝の力に依て牽牛と織女が婚を爲したる時、織を廢せずんば、七月七夕のみ會するならず、一年三百六十五日會合出来るなり。然るに婚後、織も廢したるが爲め、天帝の怒りに觸れ、遂に離別せられ、僅かに七月七夕に限りて、一度の會合を許さる。愁心は燭處に煎えざるべけんや。蓋し自業自得なり。昔惜河難越、銀河を隔て、二星が會合する能はず。然るに今夕は烏鵲河を填め橋を作り、以て渡るを得たり。唯天漢の旋り易きを傷む。刻々に時は過ぎ去ればなり。玉機上、「ハタ」の上に於て、怨を懷きて以て明年を待つものは誰ぞ。織女星是なり。此の篇は、唐律の正體、平仄諧調、曾て失格の處無し。前首に比較すれ

ば、另手に出るかの感あり。余の此を取て、彼を捨つる所以。

五言秋日於長王宅宴新羅客賦得時字

勝地山園宅

秋天風月時

置酒開桂賞

倒屣逐蘭朝

人是雞林客

曲卽鳳樓詞

青海千里外

白雲一相思

桂賞、月は桂樹を着けて美。蘭期、人は蘭交を以て香しとす。倒屣是れは近來  
見るを得ざるの事、因て記す。「三國志王粲傳」に、蔡邕は才學顯著、朝廷に貴重  
せらる。賓客座に盈つ、粲が門に在ると聞かや、【訪問せるなり】屣を倒にして之  
を迎ふ、曰く此れ王孫異才あり、吾如かざるなりと。今や人を訪ふ、玄關に待つ  
こと半時、倒屣の事、天下跡を絶つ。雞林、鳳樓、雞は凡鳥、鳳は仙鳥、事實の  
文字なるも、國家安康を解釋する筆法と同じく見れば、雞林の客は怒らざるを得  
ず。而かも主客共に桂賞蘭期の人、無事に散會せるは、洵とに天下太平の秋なれ  
ばなり。